

収容所照らした「仏陀」

盛岡生まれの医師・可児和夫さん

第2次世界大戦に敗れた直後のドイツで、ソ連が占領した収容所に4年半余り抑留された。ただ1人の日本人がいた。盛岡市生まれの医師可児和夫さん(1904～96年)。2万6千人もの餓死者を出したといわれる「地獄」で、医師として精神的にも人々の命を支え「ほほ笑む仏陀」の暁称で周りに慕われた。晩年の可児さんを知るジャーナリスト中島栄子さん(68)＝ドイツ・ケルン在住＝に託した日記や関連の資料からは、激動の時代と、そこを生き抜いたドクター・カニの強さ、優しさが浮かび上がる。



可児和夫さん(左)が収容所から持ち帰った日記の1ページ。右は可児さん(右)が収容所から持ち帰った日記の1ページ。可児さん(右)が収容所から持ち帰った日記の1ページ。

大戦後 独で旧ソ連軍に抑留



可児和夫さん(左)と中島栄子さん(右)が収容所から持ち帰った日記の1ページ。

現代史の貴重な証人

日独関係史に詳しい加藤節一郎(横大名誉教授(盛岡一高出))の語らうドイツの敗戦後、ほとんどの在日日本人は帰国したが、可児和夫氏は日本に戻らなかった少数な日本人だ。ナチスからソ連軍へ管理が変わったザクセンハウゼン

収容所の存在も最近になって知られ、そこに抑留された日本人の証人である。膨大な日記や記録が残されており、読み解けば新たな発見があるかもしれない。医師やジャーナリストといったさまざまな顔を持ち、彼の主体はどこにあったのか、謎が多くとても興味深い。

「医師として生きて、死に診察簿を書くのがドイツの習慣で、毎晩書くので、何十と書いた。可児さん(右)が収容所から持ち帰った日記の1ページ。可児さん(右)が収容所から持ち帰った日記の1ページ。」

「一生懸命が、死ぬのが苦しみを感じた。自らも死を望み、生きながらの努力が足りない。医師としての義務を全うした。だが多くは餓死して死んでいった。」

「抑留先で聞いた、死に診察簿を書くのがドイツの習慣で、毎晩書くのが、何十と書いた。可児さん(右)が収容所から持ち帰った日記の1ページ。可児さん(右)が収容所から持ち帰った日記の1ページ。」

「可児さん(左)が収容所から持ち帰った日記の1ページ。可児さん(右)が収容所から持ち帰った日記の1ページ。」

「シベリア送り」の人々励ます



可児和夫さんの寄稿を掲載する1951年5月11日付の新盛手日報1面。共産主義陣営と反共陣営の対立が顕著な中、「彼らひたすらに平和を希求している」と西ドイツ国境の様子をつづる。

「可児さん(左)が収容所から持ち帰った日記の1ページ。可児さん(右)が収容所から持ち帰った日記の1ページ。」

ジャーナリストの顔も 古里へ思い抱き続け

「可児さん(左)が収容所から持ち帰った日記の1ページ。可児さん(右)が収容所から持ち帰った日記の1ページ。」

「可児さん(左)が収容所から持ち帰った日記の1ページ。可児さん(右)が収容所から持ち帰った日記の1ページ。」

「可児さん(左)が収容所から持ち帰った日記の1ページ。可児さん(右)が収容所から持ち帰った日記の1ページ。」